

原著論文

昭和の女子野球 ―その興亡の要因―

八木久仁子¹

抄録

昭和 20 年代、終戦後の日本に数年間「女子プロ野球」なるものが存在した。敗戦の虚無感と貧困にあえぐ混迷の中、人々は憂さを晴らし安直に快感を味わえる新しい娯楽を求め、スポーツに希望を見出した。なかでも GHQ の民主化政策により後押しされた野球はいち早く復興を果たし、人々は野球に熱狂した。この戦後の新しい娯楽を求める世相に野球熱が高まり誕生したのが「女子プロ野球」である。女性解放の波に乗り社会に進出したアプレゲール（戦後派）女性たちは「女子プロ野球」に新しい女性の生き方としての期待を寄せていた。

昭和 22 年横浜から始まった「拙い女子野球」は、男女平等の民主的で新しい時代を予感させるものだった。これをうけて健康で明るい娯楽として女子プロ野球チームが相次いで創設され、容姿端麗な女性による野球興行はショー的演出も盛り込み男性ファンに歓迎された。選手は野球のできるコンパニオンとして遠征先で地元名士との交歓に励み人気を博した。初めこそマスコミにもてはやされ、昭和 25 年のピーク時にはチーム数が 30 近くにまで膨れ上がった女子プロ野球であったが、野球そのものの実力が低く、ほどなく飽きられると興行収入はがた落ち、経営基盤が脆弱な球団は数カ月もたずに解散してしまった。

残ったチームは昭和 27 年ノンプロ野球に転換して、選手は親会社の社員となり女子野球は企業の「動く PR 部隊」として昭和 30 年代を生き延びた。しかし昭和 40 年代、男子プロ野球人気が劇的に高まったのとは対照的に、女子野球は徐々に衰退していった。日本経済の巨大化とともに企業スポーツも高度化し、企業のビジネス観でスポーツの価値が測られるようになると、女子野球は TV 時代の広告塔としての価値が無いものと判断されてしまったのである。また産業構造が変化し豊かになった家庭では女性の専業主婦志向が高まり、競技を続ける女性には実業団ソフトボールへと進む途が確立したからである。

キーワード：女性、野球、昭和、アプレゲール

¹ 関西大学大学院人間健康研究科 博士課程後期課程

Japanese Women's Baseball in the Showa Era: Factors of its rise and fall

Kuniko Yagi

Abstract

After the World War II, a women's professional baseball league was founded in Japan. In those days, most of Japanese suffered from poverty and absent-mindedness, therefore they demanded cheap and make-do amusements. They enjoyed excitement from sports, especially from baseball. The "*après-guerre*" girls had hope in baseball and their future.

However, the expectations of the manager side who began Japanese women's professional baseball league as business were not the same things as players. The first Japanese women's baseball game played as spectator sports was performed by the dancers of Ginza in 1947. The game became the reputation, so that the manager gathered high-school girls and ex-high-school girls to make another team, then to make a league. The selection standard of the player in the league was good looks, not the good skills.

The number of the teams swelled to nearly 30 in the peak of 1950. Most teams were located in urban area, but they did a play often in a district. At the beginning, women's professional baseball praised by the media, but has been got tired soon because of the players' low skills. The box-office proceeds fell rapidly, and the baseball team where a management base was weak was dissolved for several months.

The team left switched it to non-professional in 1952. Japanese women's baseball teams survived over a decade as a PR troopers of the sponsor company. Popularity of the men's professional baseball increased dramatically for the TV era in the second half of 1960's. To the contrary, the women's baseball gradually disappeared. It has been judged that the women's baseball did not have the value as the advertising tower of the TV era. The full-time homemaker intention of the woman so increased that they thought it was desirable to play softball, which was considered more feminine than baseball.

Keywords: Women, Baseball, the Showa Era, *Après-guerre* Girls

はじめに

日本で最もメジャーなスポーツである「野球」、しかしそれはあくまでも男性が「するスポーツ」のことであり、女性は野球を眺めたり、応援したり、手伝ったりするだけで、女性が「するスポーツ」としての「女子野球」は未だメジャーになれていない。2020年東京五輪で採用されたのが「男子＝野球、女子＝ソフトボール」であることから「女子野球」の前途は明るくない。

しかし、日本では過去に2度にわたって「女子野球」がスポットライトを浴びた時期が存在する。明治から大正期にかけて行われた「女学校での野球」、昭和の終戦期に誕生した「女子プロ野球」、いずれも十数年で消滅し歴史を繋げることができなかった。そのため「女子野球」についての映像やデータは、厚みのある男子野球の歴史の影に隠れてしまい、先行研究も数えるほどしか存在しない。

桑原稲敏著『わたちのプレーボール』（風人社、1993年）は、たった数年活動しただけで戦後風俗史の片隅に埋もれてしまった昭和の女子プロ野球史の発掘に努めている。また、常陰純一著『私の青空』（径書房、1995年）は、「ビジネス側面が肥大化する前の人々と野球の幸福な関係」として女子プロ野球・ノンプロ野球についての出来事が記録された貴重な文献である。これら書籍の中に登場する元・女子プロ野球選手とは20年程前に対戦したことがあるが、今ではその多くの方が鬼籍に入られてしまった。彼女たちの記録を残すのに、あまり時間は残されていないと感じた。なぜ昭和の終戦期に女子プロ野球が興り、わずかな期間で消滅したのか。これら文献と直接聞き取りできる生き証人からのインタビューをもとに、明らかにしたい。

そこで、本稿では初めに、戦後の混乱期に「女子プロ野球」が誕生した社会的背景について述べ、研究方法として、存命する元・女子プロ野球選手に聞き取り調査を行い（注1）、文献と当時の資料にある女子野球（プロ・ノンプロ）にかかわる出来事についての裏付けをとるとともに、証言とエピソードから女子野球を催す側（興行師、企業）と選手側（女性）の思惑を補い、さいごに昭和の女子野球（プロ・ノンプロ）が消滅した要因について考察する。

1 女子プロ野球が興る時代背景

1.1 民主化政策と野球復興

昭和 20 年 8 月終戦により日本は GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の占領統治下におかれた。その占領政策の目的は、軍国主義を払拭して政治・経済・教育・思想あらゆる面に民主化を推し進めることにあった。女性解放、労働民主化、教育の民主化、秘密警察の廃止、経済の民主化の 5 大改革が実行され、女性に初めての婦人参政権も与えられた。

また、民主化政策を進める GHQ はスポーツに重点を置き、スポーツを通じてスポーツマンシップを身につけさせ、そこから日本人に民主主義を学ばせようとした。なかでも、アメリカの国技であるベースボール＝野球が日本で非常に人気の高いことに目をつけた GHQ は、野球の復興にはことのほか協力を惜しまなかった。占領軍チームと日本チームの野球の試合が行われた際の NY ヘラルド・トリビューン紙の社説に「もしアメリカが日本に民主主義の何たるかを教えるつもりなら、野球が一番よい。野球が教えるスポーツマンシップを日本人に十分吸収させることだ」とあるように、民主主義をもっとも具現化したスポーツである野球を通じて日本人にスポーツマンシップを学ばせ、民主主義化を図る狙いをもって野球が奨励された。

こうして戦争による中断から野球が続々と再開されていく。昭和 20 年 11 月 18 日、占領軍に接収されていた神宮球場を借用して全早慶戦が行われたのに続き、11 月 23 日には職業野球の東西対抗戦が開催された。敗戦を告げる玉音放送からわずか 100 日、東京大空襲で焦土となった東京で食うや喰わずの国民は、それでも一人 6 円を支払い 5,878 人の観客が集まった（小野，2010：174）。翌昭和 21 年 5 月には東京六大学野球が、8 月には全国中等学校野球大会が再開され、野球復活を待ち望んだファンで球場は満員となった。敗戦ですべてを失った人々は、野球に明日への夢を託し、焦土を被う重苦しい空気を払いのけるように野球に熱中した（池井，1991）。

大衆の娯楽として定着し幅広い支持層を得た野球、なかでもプロ野球はその人気の頂点に立ち、そのすそ野をさらに押し広げようとしていた。メディアがその人気に乗り加担し、積極的にそれを煽ったのはいうまでもないと土屋がいうように（土屋，2000：50）、ラジオの野球放送はアナウンサーが名調子で聴き手を熱くし、野球を題材とした映画や小説、野球雑誌が流行し、「日刊スポーツ」（昭和 21 年創刊）「デイリースポーツ」（昭和 23 年創刊）「スポーツニッポン」（昭和 24 年創刊）などのスポーツ紙も相次いで創刊された。新

聞雑誌メディアは、ただスポーツの結果を報じるのみならず、娯楽性を加味して大衆的な紙面づくりをして読者を取り込むために話題性のあるスポーツイベントを自ら企画創出してきたが、なかでも紙面を飾るコンテンツとして最も売り上げにつながる野球には積極的に食い込み、後発紙は新たな野球イベントを開発することに熱心であった。

1.2 女性スポーツ誕生の社会的背景

明治以降、日本では儒教の「三従の教え」に基づき「女は子供の時は親に従い、嫁としては夫や舅に従い、年老いては子に従う」ものとされ、女性は従順で控えめであることが強いられてきた（橘木，2011：1-11）。明治32年「高等女学校令」により全国に高等女学校が整備されると、女学生も校庭でテニスや体操などを経験するようになったが、世間一般には「女子が太い脚部を人前にさらけ出して走るなどはみともない、やはり女子はしとやかさを貴び、人前で運動すべきではない」（春日，1925：162）とされ、スポーツは女らしさ・生理機能を損ねるものとして制限されてきた。

そうした戦前までの女性スポーツ制限の様相が終戦後に一変した。GHQ 民主化政策により「女性解放」が進むと、女子学生の大学入学が認められ、たばこの配給が女性にも認められ、家庭内での妻の法的地位が向上し、古い秩序が崩壊した混沌の中にも解放的な時代に女性たちは意気盛んだった。パーマネントにロングスカートなどの先端風俗を指した「アプレゲール」という言葉は、「戦後派」という新しい時代感と「秩序破りのはみだしの」を揶揄した表現で、主に女性に対して使われた。「アプレゲール女性」たちは、戦前男の聖域とされた分野にも進出し、特にスポーツは身近な平和や女性解放の象徴として広く活躍の場を与えられた（桑原，1993：34）。

昭和20年代の女性は、中学を卒業する時点で学歴を終了する者が約半数、高校進学が約半数（注2）、いずれにしても20歳前後に結婚をして家庭に入ることが一般的であった。しかし、当時の結婚適齢期の男女人口は著しく不均衡で、昭和25年の日本の人口ピラミッドでは20歳から39歳まで男性の数が女性を大きく下回っている（注3）。こうした状況は、昭和初期から青年男性が出征して1945年の終戦を迎えるまでに数多く命を落としたことによって生まれた。人口学的にも当時の日本では女性が結婚適齢期に結婚相手を見つけにくい状況が続き、このことが働く女性の社会進出を促進し、経営や証券取引、女子競輪や女子ボクシングといった新しい領域に女性が進出する追い風ともなっていた。スポーツは本来自由解放的なものであり、女性がスポーツを行うことは女性解放に役立ち、ま

た女性が解放されればスポーツが発展すると浅井がいうように（浅井，1960：371）、女性のスポーツ参加は男女の自由平等を体現するものとして世に受け入れられ、新しい時代の女性たちにとって未知の分野や新しいスポーツ領域に飛び込む機運が高まっていた。

1.3 まとめ

戦後の混乱期、敗戦に疲れ気晴らしを求める大衆は、GHQ の後押しによりいち早く復興した野球に熱狂し、珍しいオンナの野球を見世物に一儲けしようとする興行師と、女性解放の波に乗り新しい生き方を模索するアプレゲール（＝戦後派）女性が登場することにより、日本史上初めての「女子プロ野球」が誕生した。常陰は「女子プロ野球の誕生は、人々の野球への想いと、戦後民主主義への転換の中で生じた女性解放の潮流が重なった結果といえるだろう」という（常陰，1995：42）。女子プロ野球が興った社会的背景には、戦後の民主化政策、野球熱の高まり、女性を取り巻く情勢、これらが絡み合っている存在していたのである。

2 女子プロ野球の盛衰

昭和の終戦後に興った女子プロ野球についての文献、桑原稲敏著『女たちのプレーボール』（風人社、1993年）、常陰純一著『私の青空』（径書房、1995年）に記された内容を時系列に整理し、元女子プロ野球選手である加藤（高坂）峰子の証言と加藤により保存されていた新聞記事と自筆の試合記録ノートから事実関係を埋めることにより、昭和22年頃から27年までの女子野球とその後のノンプロ野球の盛衰を描くことにする。

2.1 女子プロ野球チームの誕生

昭和の女子野球、その始まりは昭和22年8月29日横浜での貿易再開を記念する横浜文化祭のイベントとして横浜ゲーリック球場（現在の横浜スタジアム）にて開催された「横浜女子野球大会」（横浜市・神奈川新聞社・横浜文化連盟の共催）である。企業の即席チーム（ビクター横浜、ビクター戸塚、日産自動車、文壽堂、オハイオ靴店）と横浜女子商業ソフトボール部の計6チームが参加して行われたトーナメント戦では、前売券25円（通常のプロ野球外野席のチケットが15円の時代）の高額チケットが飛ぶように売れ「つた

なくも澁刺とした女子選手たちのプレーに2万の観衆をのみこんだスタンドでは沸き返った」(常陰, 1995: 43)。

8月30日付の朝日新聞では「フレイフレイ・おんな」と題する写真入りの記事で、フォアボール、エラー、盗塁が1試合に20以上にものぼるドタバタ試合の様態を伝えている(常陰, 1995: 40-41)が、拙い女子野球に「人々は女性が男性と同じく野球を楽しむ自由で民主的な新しい社会を感じていた」(土屋, 2002: 52)。こうした女性の地位向上と新しい戦後社会への期待を伴って、女子野球はまず「ハマの女子野球」として喧伝された。

これが話題となったことをうけて、銀座のダンスホール「メリーゴールド」では、ダンス教師をしていた元満州倶楽部投手荒木八郎がダンサーの女性たちに野球を教え、女子野球チームが結成された(桑原, 1993: 39-40)。そこへ、満州時代に荒木と親交のあった小泉吾郎(注4)が加わった。小泉はメリーゴールドの選手に先の横浜女子商業のソフトボール選手を合流させて、即席で「東京ブルーバード」を結成した。これが日本初の女子プロ野球チームである。

小泉率いる東京ブルーバードは1か月にわたる北海道遠征に出かけ、札幌、小樽、旭川などを転戦し、議員や医師会など地元名士の男性チームと20試合ほどを消化した。「100円均一の入場料で札幌では観客8,000人、他の都市でも3,000人を下らなかった」(桑原, 1998: 328)。どこへ行っても試合が終わった夜は宿舎や公民館の大広間で対戦相手の男性たちと交歓パーティーが催され、「試合と宴会のダブルヘッダー」が続いた(桑原, 1993: 52)。この遠征で、女子野球はアプレゲール女子スポーツの先端として注目を集めた。選手たちは新しい時代の職業女性として脚光を浴び、東横映画「野球狂時代」(斎藤虎次郎監督)や「ホームラン狂時代」(小田基義監督)にも出演した。

続く中国・九州地方への遠征でも、睡眠不足とオーバーワークの過密スケジュールをこなしながら、東京ブルーバードは16日間で10試合を消化した。小泉は各地の地回りの興行主に試合を売り、興行主はさらにマージンを乗せて対戦相手に試合を売っていた(常陰, 1995: 49)。若い女性たちが野球をやるなんてまだ物珍しい時代「どこへ行っても超満員の盛況で、一時は2千万円くらいもうかったというから小泉は笑いが止まらない」(桑原, 1993: 55)。ところが遠征の後半、当地の興行師に手玉に取られ一行の滞在費やギャラ不払いが生じ、選手は逃げるように東京へ戻った。これが原因で小泉と荒木は袂を分かつことになった。

2.2 「ロマンス・ブルーバード」結成

それでも小泉は女子プロ野球に執念を燃やし、昭和 24 年に東京ブルーバードに一般公募選手を追加した。映画製作会社「スクリーンスポーツ社」を資本金約 20 万円で設立して、これをスポンサーとしたものである。NHK ラジオの職業案内で「女子プロ野球に来たれ!」と呼びかけて選手募集が行われた入団テストの選考基準では「野球の腕前もさることながら独身で容姿端麗」という点が重視された(桑原, 1993 : 58)。映画や舞台を手がけてきた小泉のめざす女子野球は、新しい時代にふさわしいレビューのようなエンタテイメントであり、選手はいわば野球のできるコンパニオンであった。

しかしながら、500 人近くの応募のうち、大島雅子、小川アエら女性的な魅力と個性的なキャラクターの持ち主約 30 人が合格、殆どが高等女学校出身、つまり比較的恵まれた家庭に育った女学生たちだった。当時の女性にとってスポーツが経験できるのは学校の校庭しかなく、腕に覚えのある女性といえおのずと学生に限られてしまう。しかも高等女学校進学率は昭和 20 年時点で約 25%、裕福な家庭の子女でなければ進学は適わなかったからである(稲垣, 2007)。「別に野球に将来を懸けようなどと大それたことを考えていたわけではない。野球ができる、それだけで十分だった」(常陰, 1995 : 32)というように、女子プロ野球への入団に際して、選手たちには逡巡の跡がうかがえない。資料に残る写真からは、17 歳から 19 歳と若い選手たちのほぼ全員がパーマネントをあて大人びた雰囲気を醸し出しており、自分たちが周りの同年代の女子よりも一歩進んでいるという気負いがみてとれる。「つい数年前までの、軍国主義下の重苦しい日々から解放され、彼女たちの目の前には広々とした自由な世界があった。あまつさえ、世間にはそれまでになかった女性にとっての強い追い風が吹き続けている。そんななかで、彼女たちは、時代の最先端を走っている誇りを感じとっていたのかもしれない」(常陰, 1995 : 54)。

しかし、チームの経営基盤は弱く、始めこそ五千円の給料が出たものの、その後は給料も交通費も満足に払えず、選手の多くは小泉の自宅に居候した。8 月の北陸北海道遠征はたいへんハードなもので、メリーゴールド戦と地元の男子チームとの親善試合を連日行い、10 連投した大島雅子投手は「アイアン・ビューティ」と呼ばれ、当時の日刊スポーツの連載「鉄腕麗人投手」のモデルにもなった(常陰, 1995 : 58)。

2.3 「日本女子野球連盟」発足

遠征後に「メリーゴールド」は解散したが、昭和 25 年 1 月、小泉の依頼をうけた元満

州日報事業部長関浦信一が「レッドソックス」を結成、2月にはホームー製菓を後援に「ホームー女子球団」、国際観光を後援に「パールス」が誕生した。ロマンス・ブルーバード、レッドソックス、ホームー、パールスの4球団が揃ったことで昭和25年3月、日刊スポーツ社の斎藤(井上)弘夫を事務局長に「日本女子野球連盟」が結成された。

日刊スポーツ社は、以前から紙上で「鉄腕麗人投手」を連載するなど自ら女子プロ野球を盛りたて連盟設立そのものに仕掛け人として動いていたことがうかがえる。それはメディアの側がスポーツコンテンツを作り出す「メディアイベント」の体質からくるものであろう。スポーツ紙のコンテンツの柱はスポーツと芸能であるが、中でも野球が一番人気のコンテンツだった。このうち、プロ野球は読売と毎日、高校野球は朝日、社会人野球は読売と、野球の本流はすでに全国紙に組織されていたため、そこにスポーツ紙が新たに仕掛けに入る余地はない。しかし、誰も手掛けたことのない「女子プロ野球」なら、未知数ではあるもののこれから発展させられる分野であると日刊スポーツは考えたのではないか。「女子プロ野球は野球狂時代にアピールし、かつ自らのスポーツ大衆化路線にそうものだと映ったにちがいない」と土屋は述べている(土屋, 2002: 56)。

4月10日後楽園球場にて開催された「連盟結成記念トーナメント」では、圧倒的な強さを見せてロマンス・ブルーバードが優勝(常陰, 1995: 70-71)したが、決勝戦では次のような一幕があった。5回表リードするロマンス・ブルーバードは1点を返されなおも満塁のピンチを迎え、このときマウンドにいた連投のエース大島雅子は「タイム!」と云うやズボンのポケットからコンパクトを取り出し化粧直しを始めた(朝日新聞 1994.7.4)。これは小泉の命をうけて大島が演じたもので、小泉の女子プロ野球に対するショーアップ意識がうかがえる(桑原, 1993: 108)。

この試合を伝える記事には「観衆は男性が圧倒的、パーマと肉体ゆらぐなまめいた熱戦に特殊な球趣を満喫してファンは大喜び」(読売スポーツ新聞 1950.4.15)といったものや、女子選手のお尻を強調したり化粧風景をとらえたり、あるいはおしゃべりのやかましさを涙の場面を取り上げ、女らしさと野球という配合の妙を好奇の目で書き立てた(土屋, 2002: 59-60)ものが多かったが、総じて始まったばかりの女子プロ野球は、女子野球選手の野球に対する情熱とは裏腹に男性ファンは女性が行う野球試合という物珍しさに興味を持ち、女子スポーツに対する理解のないままに女性に対する一種の偏見を持って歓迎された(田中, 1995)。

記念トーナメント大会の後、ロマンス・ブルーバードとレッドソックス(中部、四国、

九州)、パールズとホーマー（東京、近畿、九州）が組になって 2 か月の地方遠征を行った。この遠征は「最初は新し物好きの都会人に人気が出たが、目の肥えたファンに見透かされると地方に 2 か月間の遠征に出た」（田中，1995）もので、初めは平均 3,000 人の観客を集めたというが「同じ場所での 2 回目以降は客足はがた落ちであった」（土屋，2002：60）。また注目されてはいたものの、当時の女子野球は社会的には定着しておらず、一般的な認識もサーカスと同じような見世物興行という域を出ていなかった（常蔭，1993：284）。

こうしてメディアが注目したことに刺激されて、各地で新しい球団が次々に誕生し、女子プロ野球は半年で最大 30 チーム近くにもなった。そのオーナーたちは多彩な個性の持ち主が集まっていた。たとえば、エーワン・ブリアンツの創始者は、当時まだ珍しかった女社長中野寛子で、アメリカ風リーゼントの流行を見越してひまし油の原料から整髪料ポマードをつくることを思いついた女傑であった。そんな中野が女子プロ野球に参画したのは「男性の野球なぞ当たり前で面白くも何ともない。女のチームならもの珍しさと話題になるに違いない」と考えたからであった（常蔭，1995：91）。

2.4 関西の女子プロ野球と映画人野球（体験談より）

女子野球流行の波は関西にもいち早く到達し、大阪で初めての女子プロ野球チーム「大阪ダイヤモンド」が誕生した。昭和 25 年 4 月 29 日神路小学校グラウンドにて入団テストが行われた中に、新制高校に進んだばかりの加藤峰子（注 5）がいた。加藤は 150 通を超えるファンレターが舞い込み（谷岡，2010：218）、メンバー紹介パンフレットの表紙を常に飾る看板選手であった。

昭和 20 年代後半、映画産業と野球を結び付ける企画として「映画人野球」がスポーツ紙の後押しをうけて開催され人気を博していた。そこでは野球の勝敗は二の次、応援団による派手なアトラクションや試合間の寸劇などエンタテインメントを追求して「非日常空間に観客も参加して喜ぶ祝祭としての野球」（土屋，2002：65）が繰り広げられた。新国劇の辰巳柳太郎や島田正吾、漫才師の芦之家雁玉や林田十郎、歌舞伎役者の坂東好太郎、宇野重吉や月形龍之介といった役者に至るまで、芸能関係者はたいていが自らの野球チームをもっていた。大阪ダイヤモンドは上方のチームらしく、これらの「映画人野球」や「芸人によるコメディベースボール」などと親交が深く何度も対戦した。俳優や芸人にかわいがられたという「女子プロ野球」の選手たちは、今でいう身近でお手頃な「会いに行けるアイドル」といった様相だったのではないか。昭和 25 年 6 月、甲子園球場で開催された

「東映野球祭」で大阪ダイヤモンドは映画人チームと対戦した。この試合の模様について加藤は次のように述懐している。

有名な方がバッターボックスに立たれた時は、塁へ出してあげねばなりません。私がキャッチャーをしている時には、なんとかこの人には長いことお客さんの前に出てもらおうと、三振なさった時にはわざとボールを逸らすんです。「振り逃げ！振り逃げ！」と言って一塁へ走ってもらいました。するとお客さんは大喜びです。そんなことをしていたと覚えています。

関西地区には、大阪ダイヤモンドに続いて、スターズ、シスターズ、神戸タイガース、神戸ダークホース、京都マルエイイーグルス、京都ヴィナス、京都八つ橋井筒、滋賀レーククインと、チームが次々に誕生した。昭和 25 年 7 月、加藤は大阪に新しくできた「スターズ」に請われて移籍する。もちろん現在のプロ野球のような高額な移籍金を伴う「契約」ではなく、あくまで口約束のようなものであった。さらに、給与面でも「給料とか契約金といったものは一切なくても誰もそういうことに文句を言わなかった」。遠征費や試合経費、遠方からの出身者には下宿を用意するなど、球団が面倒を見てくれて野球ができること、それだけで選手は幸せを感じていたと加藤はいう。また、興行主に売り上げを持ち逃げされた際には賞品のスイカを分けて空腹をしのいだというエピソードからは、杜撰な遠征模様もうかがえる。

夏場の 2 度の遠征から大阪に戻ると、加藤は次に「シスターズ」に移籍した。秋以降も女子プロ野球チーム同士の試合をこなし 12 月いっぱいまで広島遠征と、まさに試合漬けの一年であった。シスターズは翌昭和 26 年 2 月大阪日日新聞が親会社につき「大阪日日シスターズ」となり、さらに遠征先の東京では「丸金醤油」がスポンサーに加わり、宣伝のため選手は胸に大きく「丸金」と書かれたユニフォームを移動の自動車内でも着せられたという。4 月に名古屋遠征、5 月は山口県大島への遠征、6 月には東京を経て東北遠征、8 月には後樂園球場での「東西対抗戦」や大阪スタジアムでのナイターがあり、9 月からは四国和歌山遠征を行った。

加藤の 1 年半をみただけでも相当数の試合と遠征をこなしていることがわかる。概して女子プロ野球の試合スケジュールは選手の健康など度外視した過密なものであった。それは、女子プロ野球を興行として企画する球団や連盟側の思惑と、野球に打ち込む純粋な野

球少女の心意気がなせる業であった。「まだ 16～7 歳の少女たちは、プロ野球という未知の世界に飛び込んで白球を投げ、打つことに青春のすべてを賭けた。世間から白眼視されながらも厳しい練習や超過密スケジュールに耐え、大好きな野球に経済的自立の夢を描いていたからである(桑原, 1993 : 328)。

こうして、「雨後のタケノコのように誕生した女子プロ野球チームであったが、そのほとんどが資金難などからわずか数か月で」消滅し(桑原, 1993 : 121)、2年後の「ノンプロ」改編時まで生き延びたチームはわずかであった。

2.5 女子プロ野球の斜陽

昭和 25 年 7 月 23 日 24 日、後樂園球場で行われた初のナイトゲーム「読売優勝旗争奪戦」では、ポスターに「ユニホームを一新!美しくスピーディーに!」と謳い、日本女子野球連盟はショー的な演出で盛り上げた(桑原, 1993 : 139)。

しかしこの試合の後、連盟内部では、野球をエンタテインメントと捉え華やかな演出で盛り上げようとする小泉の「ショーアップ派」と、見世物的な要素を排除して純粋に野球で魅せる「健全スポーツ派」の対立がエスカレートし、少数派の小泉が脱退して創立わずか 5 カ月で連盟は分裂してしまった(桑原, 1993 : 141)。「日本女子野球連盟」は、日産パルス、三共レッドソックス、ホーマー、わかもとフラビンズ、エーワン・ブリアンツ、京浜ジャイアンツ、クロス・スターズ、京都ラアミーズ、京都ヴィナス、滋賀レイククイン、神戸タイガースの 11 チームにより再編成され、脱退した小泉が立ち上げた「全日本女子野球連盟」は、ロマンス・ブルーバード中心に名古屋レインボー、大阪ダイヤモンド、京都ラアミーズと組んで結成された。しかし、ロマンス・ブルーバードの主力選手がこぞって移籍してしまい、情熱を失った小泉がチームを解散したことで、こちらの連盟は間もなく消滅してしまった(桑原, 1993 : 142)。

昭和 25 年夏、「ショービジネス路線」をかかげた小泉の撤退により「健全スポーツ」を標榜する「日本女子野球連盟」に収斂したが、その頃から収支の低迷する女子野球を見限る企業が現れ始めた。基盤の脆弱な企業や、明確なビジョンを持たずブームに便乗して名乗りを上げた企業が、早々と女子野球界から撤退していったのである。

こうして女子プロ野球人気は下降線を描き始め、この年の 12 月 31 日付日刊スポーツには「いたずらに『プロ』を表面に押し立てた過去の過ち」と冷淡な総括がなされた。メディアはもはや女子野球を熱心に取上げはしなかった。「技量では男子のプロ野球にはとうて

い及ばず、かといって若い女性というだけでは見世物としての面白みは少ない。まして女性の野球ファン層が薄い状況ではプロリーグを支えるには程遠く、メディアにとっては魅力の薄いイベントと判断されたのであろう。メディアにもてはやされた女子野球はあっという間に見捨てられていった」（土屋，2002：63）。

2.6 「プロ」から「ノンプロ」に

「プロ」野球として観客動員だけをあてにした経営が困難であると判断した日本女子野球連盟は、昭和 27 年のシーズン前に、それまで女子「プロ」野球を標榜していたものを「ノンプロ=社会人野球」に転換することを決定した。女子野球は企業の経済支援をうけつつ商品や企業イメージを宣伝する「動く PR 部隊」として生き残りを目指すことになり、選手は親会社の社員として勤務し、それを終えてからクラブ活動として野球を続けた。連盟が発表した声明文には「選手は所属会社の社員として定職をもちつつ趣味として野球を行い、洋裁や料理など花嫁修業をして結婚することが目標である」と謳われていた。ラジオが呼びかける女子野球選手募集に心躍らせた少女たちは、因習的な拘束から飛び立って、民主的で自由な社会に新しい生き方を求めたのだったが、連盟のここへきての方針転換は、「そんな選手たちを強引に良妻賢母という従来のもラルや価値観の中に封じ込める方向へとかじを切るものであった」（桑原，1993：212）。

それでもノンプロとなってからの女子野球の実態は、プロ時代のそれと大差なかった。春と秋に公式リーグ戦を行い、それぞれの覇者が日本選手権で対戦、その他に東京都知事杯などのトーナメント大会が開かれ、公式戦の合間には地方遠征に出かけて取引関係や地元名士チームとの親善試合を行った。「ノンプロ」となってからの女子野球リーグは、プロ時代のように大きく取り上げられはしないものの、取引先接待の役割と並行して名勝負を繰り広げながら昭和 30 年代を生き延びた。

高校までソフトボールを経験した選手たちが、女子野球部やソフトボール部のある企業に就職して仕事をしながら競技を続ける。そこでは、興行収入をあてにすることもなく、男性ファンの目や見栄えを気にすることもない。商品の宣伝や企業の売上げに貢献しているかどうか費用対効果にもそれほど頓着しない。華やかではないが、女子野球が商業ベースに乗らずに野球だけで生き残ることができた 10 年間だった。ノンプロ女子野球の前半期は、映画『プリティ・リーグ』の主題「A League of their own=自分たちの野球」を日本女性が体現できたわずかな期間だったのではないだろうか。

しかし、高度経済成長を経て男子のプロ野球人気が劇的に高まり、社会人野球も隆盛を極めたのとは対照的に、女子野球は徐々にそのチーム数を減らした(常陰, 1995:170-225)。昭和 30 年代には「岡田乾電池」「坂口翁」「エーワンポマード本舗」「わかもと製菓」「京浜急行女子野球部」「キンケイ食品」が姿を消し、昭和 41 年「白元本舗」「リコー時計」、昭和 42 年「ニッカウキスキー」、昭和 45 年「三共製菓」が解散、最後の 1 つとなった「サロンパス」も昭和 46 年に活動を終了し、「昭和の女子(プロ・ノンプロ)野球」は完全に消滅してしまった(桑原, 1993 : 210-324)。

3 昭和の女子野球が消滅した要因

以上のことから、昭和の女子野球が消滅した要因についてまとめると、次のようにいうことができる。

3.1 経営母体の脆弱さ

「ロマンス・ブルーバード」は小泉自身が設立した映画製作「スクリーンスポーツ社」をスポンサーとして結成したもの、関浦に作らせた「レッドソックス」は資金主がはっきりしない(桑原, 1993 : 89) ような状況だった。最も「ハイソな球団」といわれた「神戸タイガース」のオーナーはグリル丹平の高山貴美子社長、「エーワン・ブリアンツ」のオーナーはポマードが大当たりして急成長した化粧品会社社長といったように、女子プロ野球チームは知人の口利きや個人的スポンサーであるタニマチの財布をあてに設立された「個人の持ち物」状態であったといえる。後援についての企業も「ホームー」のホームー製菓、「パールス」の国際観光、岡田乾電池、「クロス・スターズ」の日本食品、「ローズ球団」のニュースポーツ運動具店など、戦後の混乱期に創業し一過性に急成長した小企業や店舗であり、男子のプロ野球の親会社が当時の三大産業「鉄道」「新聞」「映画会社」の全国的規模の企業であるのとは対照的である。

女子プロ野球の場合は氣勢によってチームを結成はしたものの、スポンサーがいずれも経営が安定した大企業ではなく、スポンサーの懐事情が悪くなればたちまち資金源が絶たれてしまい、解散に追い込まれた。

3.2 ショービジネスとしての魅力不足

敗戦後、人々は混乱した日常からの解放と気晴らしのために、刺激的で直ちに味わえる出来合いの娯楽を求めていた。カフェや酒場の快感、スポーツや賭け事の興奮、映画での陶酔などは刹那的に現実からの逃避を助ける「阿片」としての機能を果たし（戸坂，1936：198-207）、こうした大衆の要求を背景に、興行師と云われる仕掛け人が新しい手ごろな娯楽を提供した。その中には、女性解放の副産物「性の解放」が生んだ裸レビューやストリップなどことさらに性を強調するようなものも存在し、それら電球の灯る暗幕の下での「いかがわしい娯楽」に対して、明るく開放的で健全な娯楽が求められるようになると、これに応じて種々の女子スポーツ興行が誕生した。ボクシングやプロレスといった格闘技系や女子競輪（昭和23年11月小倉競輪場）が始まり、遅れて誕生したのが女子プロ野球だった。こうして、「明るく健康的な娯楽」として始まった女子プロ野球は、男向けの見世物、接待込のお座敷野球であり、器量の良さと観客を集めていたという面が事実としてあったといえる（谷岡，2010：107）。

アプレゲール女性たちは、それまでの女性観を打ち破り新しい自己実現の手段として女子プロ野球という未知の世界に懸けていた。しかし、興行師やマスコミなど「オトコ」たちの思惑は金儲けであって、女性の解放や経済的自立を謳い煽りながらその実巧みに「おんな」の部分の商品に仕立てていた。女子プロ野球、女子プロレス、女子ボクシング、女子競輪といった、当時一過性に流行した「女子プロスポーツ興行」はスポーツというよりも女性の肉体的魅力を売り物にしていた。したがって商売として割に合わないとみるや見捨てられるのは必然だった。初めは物珍しさと客を呼べても、ドラマ性では映画に勝てず、肉体美としてはストリップに劣り、アナウンスやパフォーマンスといった枝葉に工夫を凝らしたとしても勝てなかった。戦後の何もない時代から娯楽が次々と復興してくると、見世物としての魅力に欠ける「女子プロ野球」は、「野球」の部分で勝負するしかなくなったのである。

3.3 野球の実力そのものの低さ

2.5 で前述したように、女子野球を純粋なスポーツの部分で勝負することを選択した日本女子野球連盟はその規約に「健全スポーツ」を謳い、女子プロ野球から華やかなショーの部分の切り捨てた。

しかし、男子のプロ野球に対抗してスピードや技術を競っても、筋力や脚力の違いでと

うてい太刀打ちできるはずがない。たとえば、「三共が広島カープ二軍と親善試合を行ったところ、投手の投げるボールをかたっぱしから場外ホームランされた」というように（桑原，1993：214）、男女の実力差は如何ともしがたいものがあった。女子プロ野球が人気を集めたのはもの珍しさに加えて、若い女性たちがユニフォーム姿でグラウンドを駆け躍する肉体的魅力にあったのである。野球の実力だけで観客を呼べる「プロ」としては成り立たなかった。そのためスポンサー企業に経済支援を頼り選手は所属企業の社員となる社会人野球の形＝「ノンプロ」として生き残りをめざすしかなかったのである。

3.4 テレビとの親和性の低さ

昭和28年にテレビ本放送が開始されると、街頭テレビのプロレス中継に人々が群れをなした。生放送でスポーツや世界的なイベント、事件を伝えるテレビは「即時性」と「体験の共有性」を強烈に発揮し、神武景気を経た昭和33年には受信契約100万件、皇太子ご成婚を経て昭和37年には1,000万件を突破するなど、すさまじい勢いで普及していった（百束，2015：20）。

はじめは定点型の格闘技を伝えることで精一杯だったスポーツ中継技術も、カメラ台数を増やすなど広い球場にも対応できるようになっていった。昭和33年東京六大学から長嶋茂雄や杉浦忠が入団してスターを取り揃えた男子のプロ野球は、テレビ放映の最良のコンテンツとなり、テレビの普及と相まって巨人戦を中心に全国区のファン層を開拓したプロ野球は、最も人気のあるスポーツへと登りつめた。さらにメディアが巨大化するにつれて広告料や放映権料収入など莫大な利益を親会社にもたらし、プロ野球はいよいよその王者の地位を不動のものとした。

視覚的に訴えるテレビで技術やスピードを目の当たりにすれば、女子野球のそれはプロ野球にはるかに及ばず、学生野球にも高校野球にも見劣りしてしまう。また計測器や統計が発達しスポーツの記録化が進むと、女子野球の数字や記録は圧倒的に劣っている。スポーツとしての女子野球は、テレビ時代への親和性が著しく低かったといえる。また、昭和28年テレビCMの第1号が放送されて以降、テレビの普及とともに企業の広告戦略もテレビCMにシフトしていくと、もはや企業広告塔としての価値を失った女子野球を支え続けることに企業は見切りをつけた。企業にとって女子野球はビジネスシステムのなかで間尺があわないものと判断されたのだ（常陰，1995：226）。企業に抱えられ、企業のなかで生き延びることができた女子野球は、企業理念にあわなくなると淘汰を余儀なくされたの

だった。

3.5 結婚と選手の引退

昭和一桁生まれの女性に話を聞くと、「高等女学校まで出た女性にとってなかなか釣り合う相手がいなかった」と回顧されることがあるように、昭和 20 年代初頭、結婚適齢期の男女人口は著しく不均衡で、女性が早々に結婚相手をみつけて家に入ることが叶いにくい事情があった。アプレゲールと呼ばれた女性たちは、女性解放の波に乗って新しい分野へと進出したが、そこには戦後の結婚相手不足によるやむを得ない社会進出といった側面もあった。「女子プロ野球」は、高等女学校まで出た子女たちが選んだ社会進出の一つの形であったのだ。

昭和 30 年代になっても女性の就職志向は続いたが、それは結婚するまでの繋ぎとしての就職に意味合いが変わってきた。ノンプロ野球時代の女子野球選手は、社員として競技を続け、引退後も企業にそのまま残るかもしくは企業内で結婚相手をみつけ寿退社をする。そのため「女子野球」に対する人生の懸け方が幾分和らいだことは想像に難くない。

高度経済成長が進むと、産業構造は大きく変換し、第 1 次産業人口割合が低下して第 3 次産業人口割合が著しく上昇した。昭和 34 年に 5 割を超えた雇用者割合は、昭和 40 年代約 7 割にまで到達した。所得倍増が果たされ豊かさを実感できるようになった人々の間では、サラリーマンである夫が外へ働きに出かけ妻は 3 種の神器を揃えた我が家で専業主婦となり「妻は家の内にいる」ことが一般的な家族形態となっていた。女性があえて働かなくてもよくなった時代、高等学校や短期大学を卒業後、実家で家事手伝いなどをしながらすず娘が 25 歳までに結婚して専業主婦として夫を支える、そのストーリーからはずれてまで競技生活を続ける女性の受け皿となり得たのは、企業スポーツとして整備された実業団女子ソフトボール部であった。

3.6 実業団「女子ソフトボール」の隆盛

大正期中頃にソフトボールの原型「インドアベースボール」が日本に紹介され、昭和初期に学校体育の種目となって以後、主に女子の種目として実施されてきた「ソフトボール」は、戦後昭和 21 年、日本軟式野球連盟の中に女性競技としての「ソフトボール部会」が置かれ、昭和 24 年には「日本ソフトボール協会」が分離独立するなど、全国的な組織が整備されていた。同年「第 1 回全日本高校女子ソフトボール選手権大会」、「第 1 回全日本

一般女子ソフトボール選手権大会」が開催され、翌年（昭和 25 年）には国民体育大会の正式種目に採用されるなど、女子ソフトボールは「学校スポーツ」としても「企業スポーツ」としても根付いていった（注 6）。

高度成長時代以降の女性は、サラリーマンの妻となり専業主婦になることに憧れ、そこに自己実現の途を描くようになっていた。それでも高いレベルでの競技に専念しようとする女性は、もはや野球には進まず、ソフトボールを「学校部活動で経験して、実業団に進む」というキャリアロードができあがった。こうして女性にとっての野球へのかかわり方は次のように決着した。「見るスポーツ」としての野球はプロ野球をテレビや球場で観ることで、「支えるスポーツ」としての野球は甲子園の女子マネージャーや少年野球の母親として、「するスポーツ」としての野球はソフトボールで行われることとなった。投げて、打って、走りたい女性には「ソフトボール」に限定した選択肢が膳立てされたのである。ここからさらなる普及と強化が進められた結果、女子ソフトボールは 2008 年北京オリンピックの金メダルにたどり着いたのだった。

高度成長が終焉した昭和 40 年代後半、刈取り後の田んぼが開発に消えても住宅街の空き地では巨人帽をかぶった男子が草野球に興じていたが、グローブをはめバットを手にした女子はソフトボール部をめざした。そしてまた、日本には野球をする女性がいなくなってしまった。

3.7 まとめ

戦後の期待を背負い世に歓迎されて華々しく始まった女子プロ野球は、僅か 2 年で「プロ」としての活動を終止した。それは、①急成長した会社の社長など個人的な財布をあてに球団がにわかに作られたため、そもそも経営基盤が脆弱だったこと、②「健康康的な娯楽」として始まったが物珍しさと話題性だけではすぐに飽きられてしまい、見世物としての魅力に欠けたこと、③ショー的要素を取り除いて野球の部分で勝負しようとしたが野球そのものの実力が低かったこと、が要因である。

スポンサー企業に経済支援を頼る社会人野球＝「ノンプロ」野球の形に移行してからの女子野球は、プロ時代のように華々しくはないものの会社の運動部として昭和 30 年代を生き延びた。しかし、高度経済成長時代がいよいよ加速化してくると、④TV 時代における広告塔としての価値が無いものと判断されてしまったこと、⑤また、女性の専業主婦志向が高まり、競技を目指す女性には「実業団女子ソフトボール」が組織整備されたことか

ら、女子野球の灯は高度経済成長の間に消えてしまった。

こうして再び女子野球はプレーされることがなくなり、女子の大学・短大進学率が上昇して女性のスポーツ選択がさらに広がる平成の時代まで、暫しの空白期間を迎えたのだった。

注

(注 1) 元女子プロ野球選手・加藤（高坂）峰子（昭和 8 年 8 月 16 日生まれ）に、2016 年 3 月 4 日、大阪市中央区の「アラビヤコーヒー」にて聞き取り調査を実施した。その際、①新聞記事、②雑誌、③メンバー表、④試合記録ノート等の資料提供をうけた。

(注 2) 昭和 15 年に旧制中学校への進学率は約 7%で高等女学校や実業学校を含めても約 25%にすぎなかった。新制高等学校への進学率は昭和 25 年で 42.5%、昭和 29 年には 50%。大学進学率は昭和 30 年半ばまで 1 割にも達していなかった。

文部科学省統計要覧 e-Stat 学校基本調査 年次統計（参照日 2016 年 11 月 11 日）
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm

(注 3) 25 歳から 34 歳では男性の方が 100 万人以上も少ない構成になっている。

総務省統計局国勢調査 e-ガイド（参照日 2016 年 10 月 10 日）

ftp://157.205.71.186/test/stat/data/kokusei/2010/kouhou/useful/u01_z07.htm

(注 4) 小泉吾郎。芸能と野球関係に広い人脈を持ち、のちに「終戦直後に日本で最初の女子プロ野球チームを編成し、女性の世相風俗やスポーツ史に記念すべき一ページを記したバイオニア」となった人物である。満州滞在時に築いた野球と興行の人脈が、後年小泉が女子プロ野球を始める際の大きな礎となった。芸能に携わるなかで小泉は「何事においてもブスはダメだ」という信条を持つに至り、女子プロ野球の選手募集においても「容姿端麗」が野球の実力よりも優先された（小泉 1982；桑原 1993）。

(注 5) 加藤（高坂）峰子。「大阪ダイヤモンド」「大阪スターズ」「日日シスターズ」でプ

レーした内野手で「愛称ミミー」。自筆の試合記録ノートには、昭和 25 年 6 月 4 日甲子園球場での東映映画人との試合から、昭和 26 年 9 月遠征分までの試合について記載されている。それによると、大阪球場や日生球場（資料中では日赤球場となっている）といった大球場での試合もあれば、長居公園といった、草野球や子供の遊び場になっているようなグラウンドのときもあった。

（注 6）女子野球が最後の「サロンパス」1 チームに追い込まれた昭和 45 年までのソフトボール日本一には「高島屋大阪」7 回、「塩野義製菓」3 回、「伊予銀行」4 回、「ユニチカ垂井」4 回、「倉敷紡績安城」2 回と、実業団ソフトボール部（企業チーム）が隆盛を極めた。

文献

- 浅井浅一（1963）集団領域の分析的研究. 体育学研究, 7(1), 日本体育学会.
- 池井優（1991）野球と日本人. 丸善出版.
- 井土敏慧（1923）直方高女野球部の亡ぶ迄. 野球界, 12(6) : 20-26.
- 稲垣恭子（2007）女学校と女学生. 中央公論新社..
- 江刺正吾（1992）女性スポーツの社会学. 不昧堂出版.
- 小野俊哉（2010）プロ野球最強のベストナイン. PHP 研究所.
- 春日豊（1925）女子運動界の汚点. スポーツマン, 中央運動社 : 161-162.
- 関東女子野球連盟（1996）第 8 回関東女子野球大会プログラム.
- 桑原稲敏（1993）女たちのプレーボール—幻の女子プロ野球青春物語. 風人社.
- 小泉吾郎（1982）わが青春と満映. 舷燈社.
- 高津勝（1994）日本近代スポーツ史の底流. 創文企画 : 240-25.
- 鈴木江北（1922）女子野球夜話. 野球界, 12(11) : 54-55.
- 主婦の友（1950）戦後派娘の朗らか座談会. 主婦の友, 35(4), 主婦の友社 : 358-365.
- 橘木俊詔（2001）女性と学歴. 勁草書房.
- 田中亮太郎（1995）日本における女子野球に関する研究. 大阪芸術大学紀要, 18.
- 谷岡雅樹（2010）甦る！女子プロ野球. 梧桐書院.

- 玉木正之（1999）スポーツとは何か．講談社：68-71.
- 土屋礼子（2002）創刊期のスポーツ紙と野球イベント．津金澤聰廣，戦後日本のメディアイベント 1945-1960 年．世界思想社：46-69.
- 常陰純一（1995）私の青空—日本女子野球伝．径書房.
- 戸坂潤（1936）学生スポーツ論．戸坂潤選集第 4 巻思想と風俗，伊藤書店：198-207.
- 百束朋浩（2015）日本におけるテレビの普及期と転換期の社会構造比較研究．東京工芸大学芸術学部紀要 21：19-25.
- 国立社会保障人口問題研究所ホームページ <http://www.ipss.go.jp/>
（参照日 2016 年 10 月 10 日）
- 公益財団法人日本野球連盟ホームページ <http://www.jaba.or.jp/gaiyou/index.html>
（参照日 2016 年 5 月 22 日）
- 公益財団法人日本ソフトボール協会ホームページ <http://www.softball.or.jp/>
（参照日 2016 年 5 月 1 日）